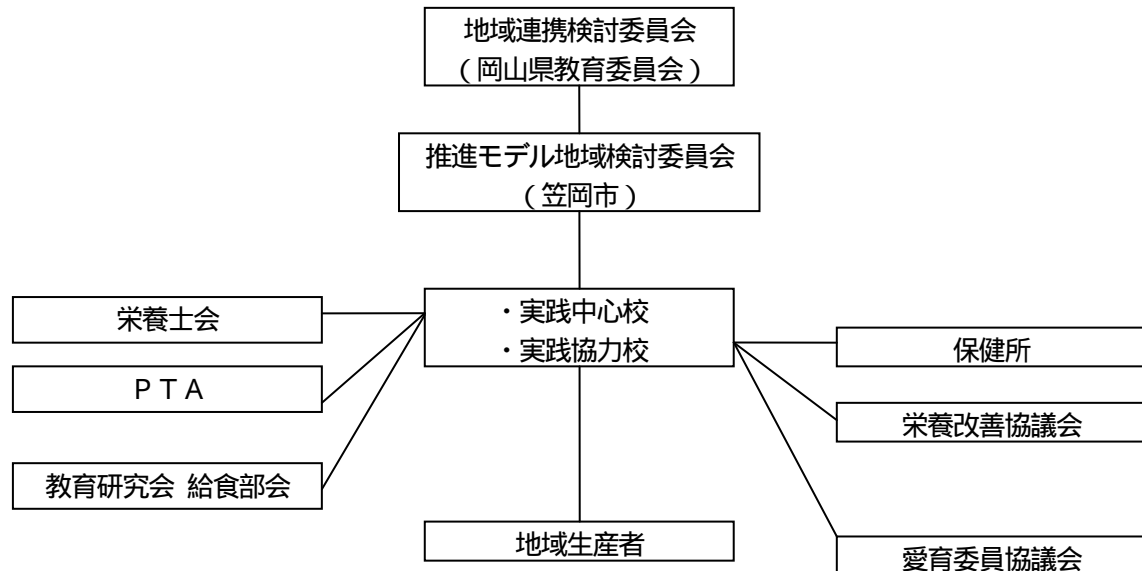


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	岡山県
再委託先	笠岡市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ	笠岡市小中学校 生活習慣・食生活を含めた生活リズム向上のための方策の検討
	<p>モデル地区（笠岡市）における基本データの収集 事業実践取組前後のアンケート調査の実施（5月、11月下旬） <生活習慣及び食習慣の実態と健康等に及ぼす影響について> （調査対象）小学校4・6年生児童（n=870）、および中学校1年生生徒（n=462） 対象小学生及び中学生の保護者（n=1097） （おもな質問項目）児童・生徒の質問項目は7項目 （朝食・給食・夕食・睡眠・運動・勉強・健康等） 保護者の質問項目は5項目 （朝食・給食・夕食・運動・健康等）</p> <p>得られたデータを解析し、実態を把握し、食に関する指導に活かせるように情報提供していく。また、報告書にまとめるとともに岡山県教育庁保健体育課のホームページに掲載する。</p> <p style="text-align: center;">http://www.pref.okayama.jp/page/detail-93034.html</p>

テーマ1に共通する具体的計画

(1) 検討委員会

【地域連携検討委員会】

推進地域の課題等を把握し事業内容、実施方法について協議と指導を行うための会議を年2回実施する。

第1回地域連携検討委員会の開催(平成23年9月2日)

第2回地域連携検討委員会の開催(平成24年2月13日)

<会議の協議内容>

・推進地域における学校園及び関係機関・団体との連携・協力について協議し、円滑な事業実施となるよう支援する。

事業進行状況の説明

委員相互のモデル地域への支援事項の確認等

実施報告書の作成について

(2) 推進モデル地域(実践中心校)

<笠岡市>

実践中心校

学校名	校長名	児童数
笠岡市立神内小学校	小寺 稔	120人

数字で変化のあった事項について

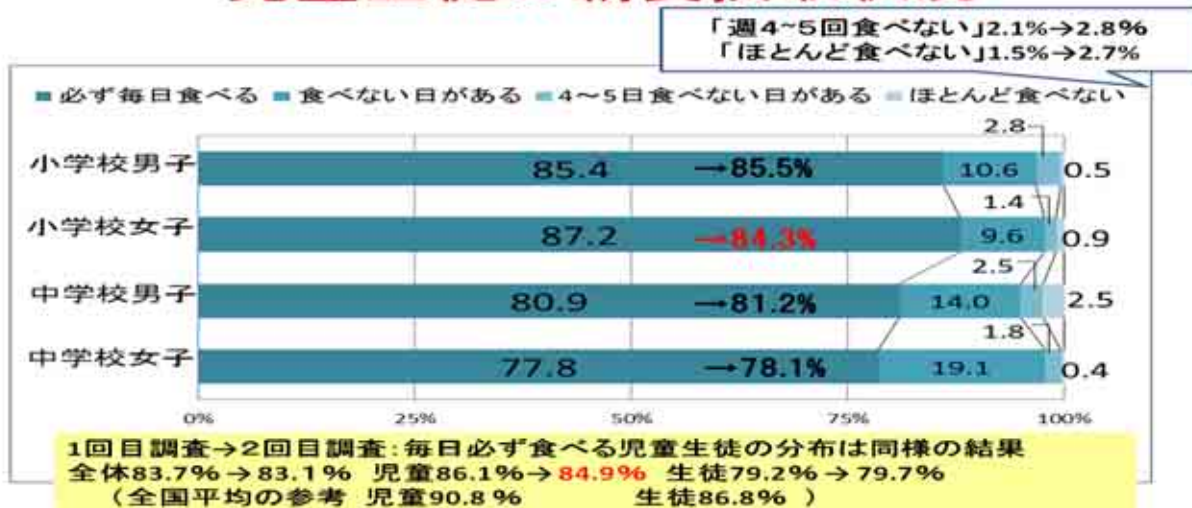
【結果の概要】

児童生徒

笠岡市小中学校の児童生徒1417名を調査対象とし、第2回アンケートを配布したところ、93.9%の回収率で、1330名を集計対象として単純集計を行った。

朝食の摂食状況について、「毎日食べる」と回答した割合は全体として83.1%(1回目83.7%)、児童84.9%(1回目86.1%)、生徒79.7%(1回目79.2%)であり、全国平均の児童90.8%、生徒86.8%に比較すると依然やや低いものであった。しかしながら、「週4~5回食べない」ものは、2.8%(1回目2.1%)、「ほとんど食べない」ものは2.7%(1回目1.5%)の分布を示し、朝食頻度に改善は認められなかった。

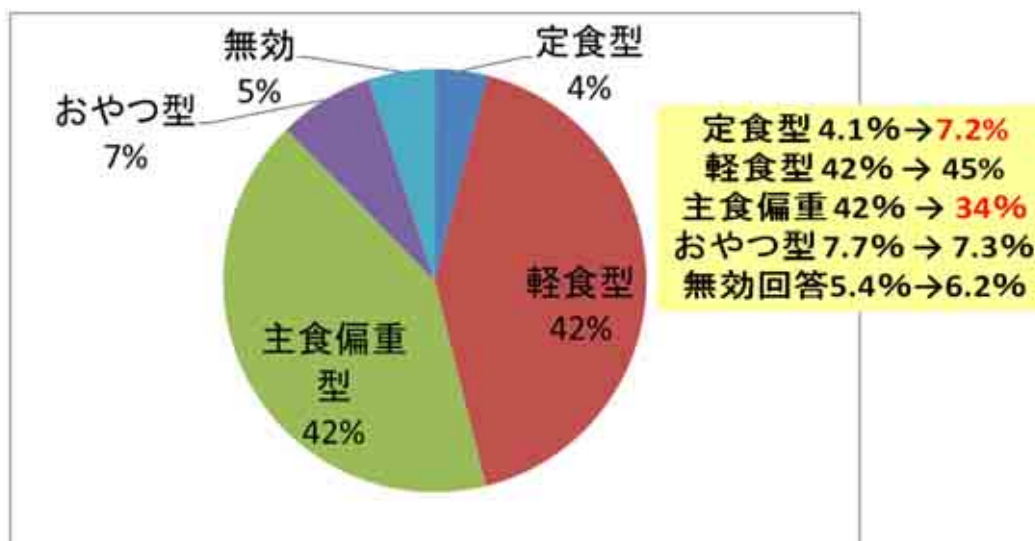
児童生徒の朝食摂取状況



その理由は「お腹がすいていない」、「休みの日は食べない」、「食べる時間がない」が多かった。朝食への意識は96.7%(小学校97.7%、中学校94.8%)でありほとんどの児童生徒で大切と答えた(1回目全体95.7%、小学校95.7%、中学校96.5%)。小学校よりも中学校において朝食欠食は多く、特に女子生徒では毎日食べるものが77.4%と依然少ないものであった。また小学校においてもわずかではあるが食べる頻度が少ないほうへ分布していた。

一方で、朝食の内容については定食型 7.2% (1 回目 4.1%)、軽食型 45.1% (1 回目 44%)、主食偏重 34.2% (1 回目 44%)、おやつ型 7.3% (1 回目 8%) であった。

児童生徒の朝食の内容



給食の残食については、第 1 回と同様の分布であった。給食での地場産物使用を知っている者は 80.7% あり、特に小 6 は 85.2% (第 1 回 76.7%) と高い割合であった。

児童生徒の給食地場産の認知



生活習慣については、就寝時間が 11 時をすぎるものが 2 割、運動や外遊びをあまりしないものが 5 割と 1 回目と同様の結果であった。

児童生徒の保護者

笠岡市小中学校の 1422 を調査対象とし、第 2 回アンケートを配布し 72.2% の回収率で 1027 名を集計対象として単純集計を行った。

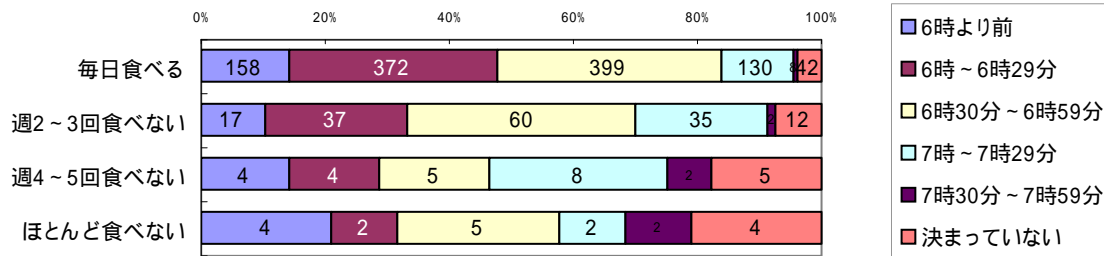
子どもの朝食摂食状況について、学校のある日のうちで「毎日食べる」と回答した割合は全体として 90.5% であった。保護者自身の平日の朝食摂食頻度、調理にかかる時間、朝食への意識の状況は 1 回目と同様の分布であった。

給食について献立表、給食便りを見ると答えたものの割合は 1 回目と同様の分布であった。また給食に地場産物が使われていることを知らない保護者は全体で 5% (1 回目 8.6%) であった。

<児童生徒における朝食頻度と健康・生活関連項目との関連>

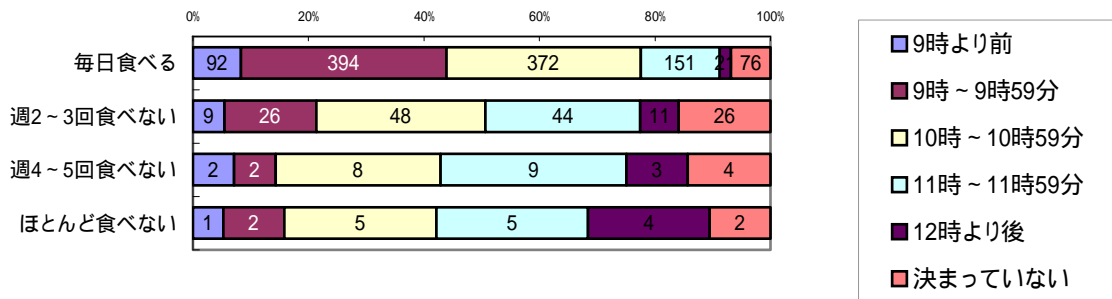
朝食を食べる頻度が高いほど、起床時刻「7時までに起きる」、就寝時刻「10時までに寝る」、健康状態として「いつも調子が良い、よい日が多い」、「大便秘が毎日出る」ものが多い傾向であった。また、朝食を食べる頻度が高いほど、「午前中眠くなるか」の項目について「ならない」ものが多い傾向であった。また、朝食を食べる頻度が高いほど、「朝食をたべることが健康のために大切だと思う」と答える傾向があった。また、朝食を食べる頻度が高いほど、夕食時の会話についても「いつも話す」「ときどき話す」ものが多い傾向であった。

<朝食摂取頻度と起床時刻の関係>

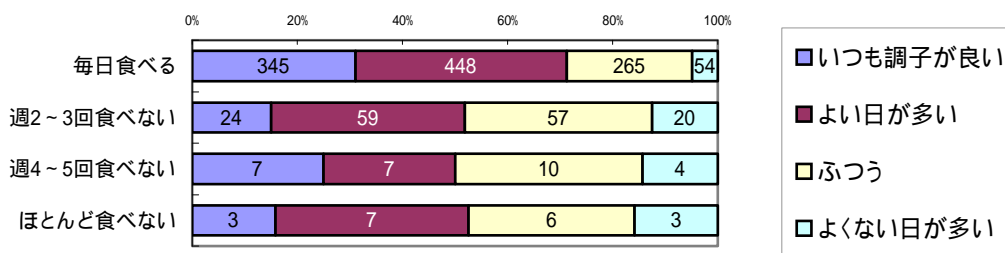


*「設問1. 朝食は週何日食べますか」の回答は、[7日]に回答したものを[毎日食べる]、[6~4日]に回答したものを[週2~3回食べない]、[3~2日]に回答したものを[週4~5回食べない]、[1~0日]に回答したものを[ほとんど食べない]と分類した

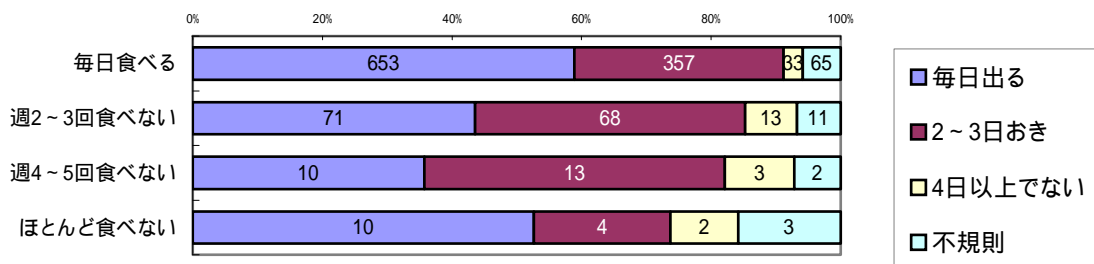
<朝食摂取頻度と就寝時刻の関係>



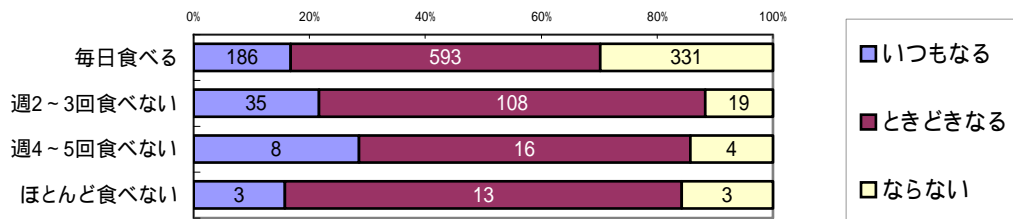
<朝食摂取頻度と健康状態の関係>



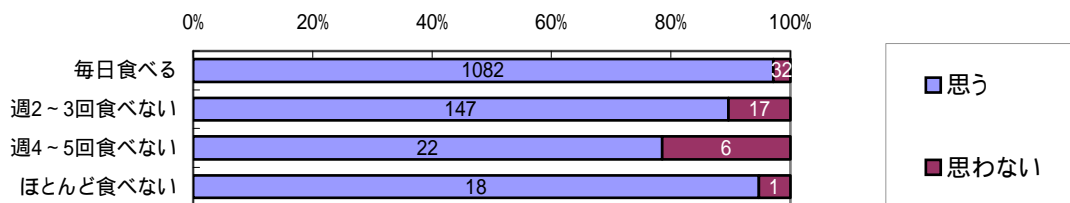
<朝食摂取頻度と排便関係>



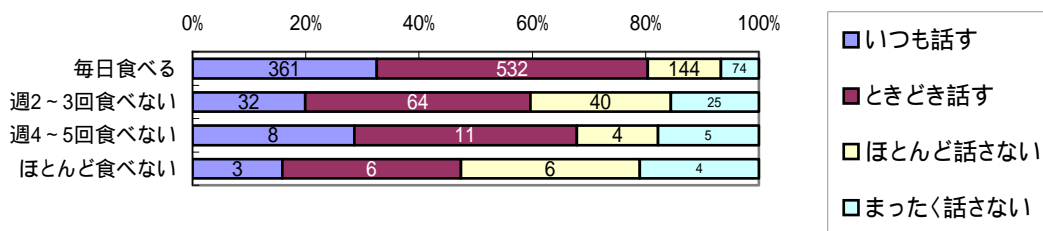
<朝食摂取頻度と午前中の眠たさの関係>



<朝食摂取頻度と朝食の重要性についての認識の関係>



<朝食摂取頻度と夕食時の会話について関係>



(2) 児童生徒における朝食頻度と健康・生活関連項目、夕食の共食と健康・生活関連項目との関連

・朝食頻度を4段階に分類し健康・生活関連項目との関連を検討したところ、朝食を食べる頻度が高いほど、「起床時刻「7時までに起きる」、就寝時刻「10時までに寝る」、健康状態として「いつも調子がよい、よい日が多い」、「大便が毎日です」ものが多い傾向であった。また、朝食を食べる頻度が高いほど、「午前中眠くなるか」の項目について「ならない」ものが多い傾向であった。また、朝食を食べる頻度が高いほど、「朝食をたべることが健康のために大切だと思う」と答える傾向があった。

・夕食共食状況を2段階に分類し、健康・生活関連項目との関連を検討したところ、「子どもだけ、またはひとりで食べる」ことがある子どもは、「家族にその日にあったことなどを話すか」という項目について、「ほとんど話さない、または全く話さない」割合が高い傾向であった。夕食を「子どもだけ、またはひとりで食べる」ことがある子どもは、就寝時刻「11時以降」と回答するものが多く、健康状態については「午前中眠くなる」ことが「いつもある」割合が高く、「体の調子」は「いつも調子がよい」と答える子どもが少ない傾向であった。

(3) 児童生徒、または保護者の自己採点と健康・生活関連項目との関連

・食生活や生活習慣の自己採点については、児童・生徒では80点以上が全体の58%に対し、保護者は27%と低かった。また60点以下のものは児童・生徒で20%、保護者は45%であり、保護者は低く評価することが示唆された。児童生徒または保護者の自己採点を3段階に分類し健康・生活関連項目との関連を検討したところ、朝食や給食の摂食状況や意識、また生活時間や運動状況、健康状態など多くの項目に関連がみられた。

(4) 児童生徒の朝食摂取状況に及ぼす家庭の食事環境の影響

・児童生徒が朝食を毎日食べることに及ぼす家庭での食事環境の影響を検討するため、2回目の調査において家庭ごとの調査に協力が得られた266家庭の児童生徒と保護者の対応データを用いて分析した結果、児童生徒の朝食状況は「毎日朝食を食べる」、「朝食を食べない日がある」に分類し、保護者の各項目の関連性を検討すると、性別、年齢、調理担当者の就業状況について、有意差はなかった。

・「毎日朝食を食べる」児童生徒では、保護者の朝食頻度が高い家庭である傾向が認められた。また、児童生徒が「毎日朝食を食べる」家庭の保護者は、朝食を食べなくても他の食事で補えると「思う」と回答す

る割合や、朝食は子どもの健康にとって大切であると「思う」と回答する割合が高かった。また、子どもが朝食を食べなかったり残したりすることが「ない」と回答する割合や、食事中にマナーや食べ方を教えることが「ある」と回答する割合も高く、自分の食生活や生活習慣の自己採点も高い傾向が認められた。

・保護者の朝食づくりの状況と児童生徒の朝食内容との関連については、児童生徒の朝食内容及び保護者の朝食にかかる調理時間を「20分以上」と「20分以内」に比較して定食型の占める割合は、高い傾向だった。

表2. 児童生徒の毎日朝食摂取の有無別の属性と食生活状況の比較

	朝食を毎日食べる	朝食を食べない日がある	有意確率
n	220	45	
保護者年代			
20代	2 (100.0)	0 (0.0)	0.595
30代	87 (82.9)	18 (17.1)	
40代	118 (83.7)	23 (16.3)	
50代	8 (72.7)	3 (27.3)	
その他	1 (50.0)	1 (50.0)	
保護者性別			
男性	5 (62.5)	3 (37.5)	0.143
女性	211 (83.4)	42 (16.6)	
勤務状況			
勤めをしている	154 (80.2)	38 (19.8)	0.082
勤めをしているが朝は余裕がある	24 (88.9)	3 (11.1)	
勤めをしていない(家にいる)	41 (93.2)	3 (6.8)	
保護者の朝食摂取状況(平日)			
毎日食べる	194 (87.8)	27 (12.2)	0.000
週1~2回食べない日がある	9 (60.0)	6 (40.0)	
週3~4回食べない日がある	7 (70.0)	3 (30.0)	
まったく食べない	7 (43.8)	9 (56.3)	
朝食の調理時間(準備も含めて)			
10分以内	88 (82.2)	19 (17.8)	0.385
10~19分	96 (86.5)	15 (13.5)	
20~29分	25 (75.8)	8 (24.2)	
30分~1時間	9 (90.0)	1 (10.0)	
1時間以上	1 (50.0)	1 (50.0)	
朝食の内容			
和食	62 (78.5)	17 (21.5)	0.062
洋食	79 (85.9)	13 (14.1)	
だいたい半分	61 (88.4)	8 (11.6)	
いつも両方準備	9 (90.0)	1 (10.0)	
菓子パン・ヨーグルトなど単品	6 (66.7)	3 (33.3)	
その他	1 (33.3)	2 (66.7)	
子どもは朝食を残すことがある			
よくある	7 (63.6)	4 (36.4)	0.002
ときどきある	64 (74.4)	22 (25.6)	
ない	146 (89.6)	17 (10.4)	
朝食を食べなくても他の食事でおぎなえると思う			
思う	3 (60.0)	2 (40.0)	0.039
少し思う	14 (66.7)	7 (33.3)	
思わない(朝食は食べなくてはいけない)	203 (84.9)	36 (15.1)	
朝食は健康のために大切と思う			
思う	219 (83.9)	42 (16.1)	0.016
少し思う	1 (25.0)	3 (75.0)	
思わない	0	0	
食事中に食べ方の注意をすることがあるか			
ある	143 (87.7)	20 (12.3)	0.031
ときどきある	72 (75.0)	24 (25.0)	
ない	4 (80.0)	1 (20.0)	
食生活・生活習慣の自己採点			
100点	5 (100.0)	0 (0.0)	0.031
90点	12 (92.3)	1 (7.7)	
80点	43 (84.3)	8 (15.7)	
70点	54 (80.6)	13 (19.4)	
60点	80 (87.9)	11 (12.1)	
50点以下	21 (63.6)	12 (36.4)	

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・岡山県笠岡市公立小学校4年・6年生、中学校1年生の全児童生徒、およびその保護者を対象として、基礎データの収集を行ったことにより、各学校の食に関する実態や意識等を把握し、学校や家庭における食育の基礎資料を得ることができた。
- ・今回の食に関する実態調査解析により、朝食の摂取頻度を高め、家族と食事を共にする機会を増やすことは児童生徒の生活リズムをととのえ、体の健康を支えることにつながることを示された。
- ・児童生徒が、毎日朝食を食べることの背景として、家庭における保護者の朝食摂取頻度や意識が影響する可能性が示唆された。

- ・ 児童生徒の食生活を含めた生活リズム向上のためには、食生活・生活習慣のQOLを高めることが必要となる。児童生徒及び保護者の特徴が明らかになった。
- ・ 児童生徒の食生活・生活習慣の基盤は家庭にあり、保護者の食生活・生活習慣への関心が児童生徒の食生活・生活習慣影響すると考えられる。
- ・ 児童、保護者とも給食の地場産物利用認知の割合は、やや高い分布となり、食に関する指導の効果が知識の面で得られたものと考えられた。一方で給食の残食、嫌いなものでも食べるという態度には影響がなく、給食の良さを見直し進んで食べられるよう各学校ごとに実情に応じた学校全体での取り組みが必要と考えられた。

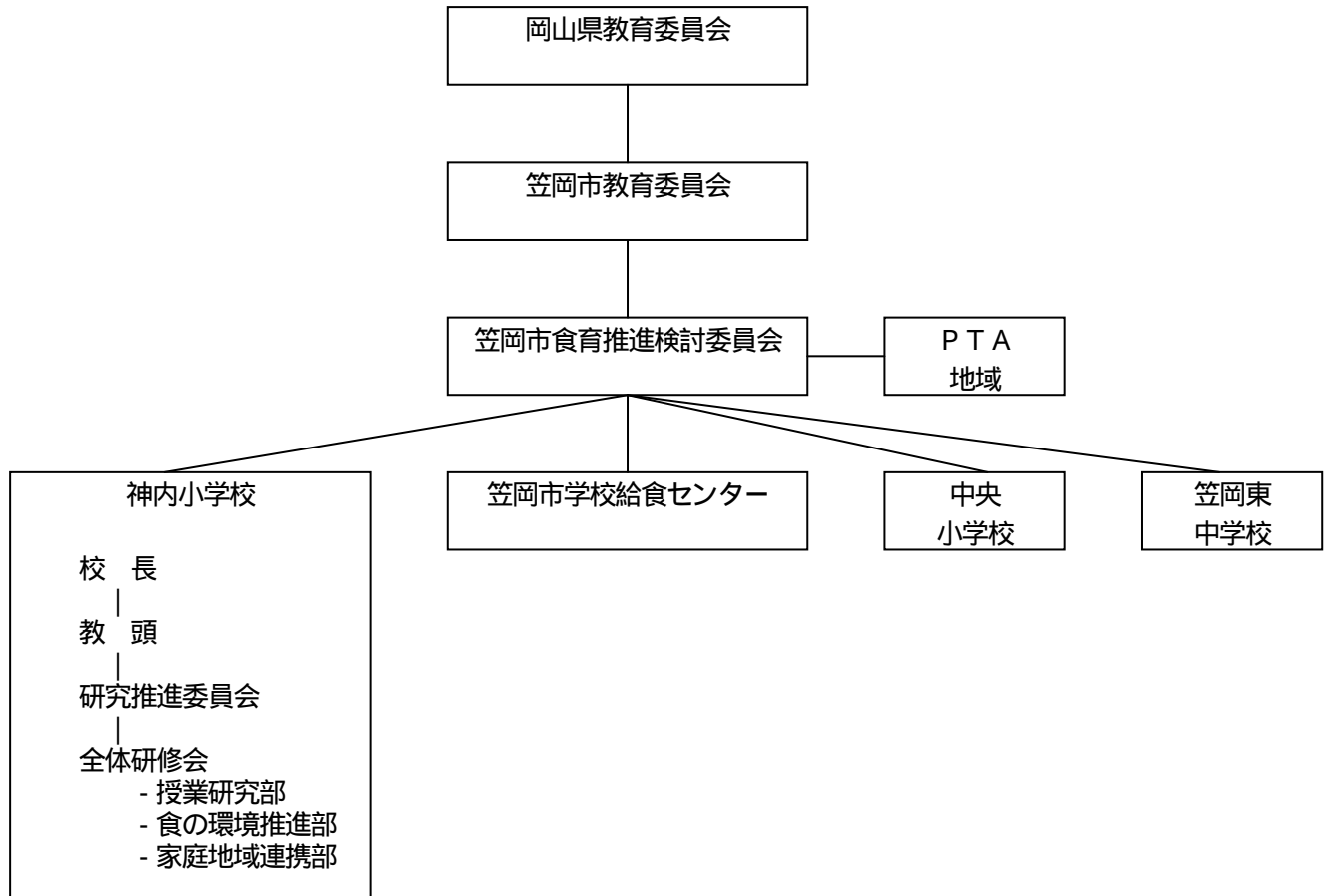
今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- ・ 今回の食に関する実態調査解析により、朝食を食べることは大切であることの意識は、児童生徒、保護者のいずれも高いものの、望ましい朝食づくりを実行できる家庭が独立行政法人日本スポーツ振興センターによる平成19年度児童生徒の食事状況調査の児童90.8、生徒86.8%に比較すると低い現状であったことから、保護者の意識や行動にも配慮しつつ、今後も家庭および児童生徒へ継続して改善に向けた取り組みが必要と考えられる。
- ・ 今後、児童生徒の保護者に対して、学校・地域が連携し、食育を推進していくために保護者の関心意欲を高めるような対策・工夫が必要になってくる。継続した食に関する情報提供、児童生徒への食に関する指導の充実が望まれる。

再委託先名

笠岡市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科・領域等の授業及び学校給食を通した食に関する指導

各学校で活用できる食に関する指導の全体計画や実践の開発

食に関する指導の6つの目標（文科省「食に関する指導の手引」）を踏まえた各教科・領域等の授業と給食時間の指導を位置付けた年間指導計画を開発した。実践中心校である神内小学校では、10月26日に研究発表会を開催し、年間指導計画に従って“内容レベル”での食育の授業（学級活動、社会、家庭），“活動レベル”での食育の授業（総合的な学習の時間），“題材レベル”での食育の授業（道徳の時間）を、全学級で公開した。食育の「ねらい」ではなく食育の「視点」を設けて授業をすることの意味を参加者に伝えることができ、各学校で食に関する指導を推進するための現実的・具体的な示唆を得ることができた。また、担任・専科と栄養教諭それぞれの専門性を生かして、チームティーチングの授業を実施する意義や留意点についても明確に示すことができた。



6月に実施した市内小中学校生活習慣・食生活アンケート調査の結果に基づき、「朝食」の摂食率を向上させる一助とするために、栄養教諭が中心となって学年・発達段階に応じた朝食に関する実践を開発・実施した。10月下旬～11月下旬にかけて市内5校（小学校3校，中学校2校）で栄養教諭が授業を行ったが，授業後には児童生徒が自宅へワークシートを持ち帰り，保護者と一っしょに「我が家の朝食」について考える機会を持った。またそれ以外の児童生徒・保護者にも，この授業の内容を給食だより等を通して伝えた。



実践中心校での研究発表大会の開催

10月26日の研究発表大会には，県内外から200名近い参加者が得られた。各教科・領域等の授業公開と，国土館大学北俊夫教授による「学校における食育の推進」という講演を通して，食に関する指導の具体的な方策について参加者は共通理解することができた。

北教授は

- ・食育基本法は，私たちの食生活や健康面に多様な課題があることから制定された。
- ・学校で進める食育のキーワードは次の3点である。
 1. 「どこでも」全ての学年で，様々な教科等の授業を通して進める。
 2. 「いつでも」幼稚園から大学まで継続的に取り組む生涯学習である。
 3. 「みんなで」全ての先生が取り組む体制を作る。
- ・「どこでも」「いつでも」「みんなで」取り組むことにより，食育は点から線へ，線から面へと広がっていく。

という内容の講演を通して，神内小学校や笠岡市の取組に一定の評価を示した。

食に関する指導体制づくり

有識者等を委員に含む食育推進検討委員会を設置した。第1回委員会は6月下旬，第2回は神内小学校研究発表会と同時に，第3回は2月中旬に開催した。給食の試食，事業内容の報告，アンケート調査の分析結果報告等を経て，意見交換も行った。

給食献立の工夫

7月29日には，学校における食に関する指導の基礎となる安全・安心な給食作りのために，衛生管理講習会を行い，調理員の資質向上を図った。

地場産物を利用した給食献立を実施し，その意味や願いを「給食だより」などを使って積極的に啓発してきた。

テーマ2 食に関する指導を充実させるための学校・家庭の連携

家庭への啓発活動

神内小学校では，生活習慣・食生活アンケート調査の結果や朝食に関する指導内容を抜粋して知らせたり，学校での指導後に家庭で「バランスのよい朝食メニュー」を子どもと一っしょに考える機会を作ったりして，家庭との連携を重視した取組を実施した。

笠岡市教育委員会や笠岡市学校給食センターでは，毎月全家庭へ発行する「給食だより」や年6回発行する「食育だより」を通して，主として朝ごはんの必要性を伝えたり，地場産の食材を活用した給食の紹介をしたりした。

給食試食会の開催

神内小学校の第2学年ふれあい参観日には，児童が給食



の準備・配膳を行っている様子を見た後、保護者もいっしょに給食を試食した。学校給食や栄養バランスの取れた食事についての理解を深めてもらった。

親子料理教室

市内小学校の第3学年親子料理教室では、地域の栄養委員・愛育委員の方々に指導していただきながら調理し、主食・主菜・副菜がそろった栄養バランスのよい料理について理解を深めた。

アンケート調査の実施及び分析・考察

市内小学校4年、6年、中学校1年及びその保護者を対象として、6月に第1回目の生活習慣・食生活アンケート調査を実施した。結果の分析・考察を元に「朝食摂食率の向上」に目標をしばって事業を推進することとした。第2回目の調査は11月末に実施した。

簡単でバランスのよい朝食レシピの考案・紹介

栄養教諭等の朝食に関する指導を経て、保護者と子どもが考えた「簡単に準備できて栄養バランスのよい朝食献立」を収集し、よいアイデアのものをレシピ化して給食展等で紹介した。



テーマ3 食に関する指導を充実させるための学校・地域の連携

笠岡市食育推進計画と連動した体験的な学習の実施

市内小学校では、地域の方々（低学年）や営農センター（中・高学年）の方に協力していただき、サツマイモの栽培を行った。植え方や世話の仕方などについて指導を受け、秋には収穫して学級ごとに調理したりPTA行事で焼き芋にしたりして味わった。

5年生は、総合的な学習の時間「安全・おいしいHOT米をつくろう」で営農センターの方の協力を得て、これまでもバケツ稲の栽培に取り組んできた。本年度は、棚田での田植え・収穫も体験した。もち米を使って「餅つき大会」を全校児童で行った。



テーマ1～3に共通する具体的計画

(1) 児童生徒の実態

食に関する実態の変容を見るために、第2回目のアンケート調査を笠岡市小中学校児童生徒1417名を調査対象として実施した。93.9%の回収率で、1330名を対象として集計を行ったが、第1回目と比較すると以下のとおりであった。

朝食の摂食状況について、「毎日食べる」と回答した割合は全体として83.1%(1回目83.7%)、児童84.9%(1回目86.1%)、生徒79.7%(1回目79.2%)であり、全国平均の児童90.8%、生徒86.8%に比較すると依然としてやや低いものであった。「週4～5回食べない」者は2.8%(1回目2.1%)、「ほとんど食べない」者は2.7%(1回目1.5%)の分布を示し、朝食の摂食頻度に改善は認められなかった。その理由として挙げられたものは「お腹がすいていない」「休みの日は食べない」「食べる時間がない」等が多かった。朝食への意識を見ると、96.7%(小学校97.7%、中学校94.8%)の児童生徒が「大切である」と答えている(1回目全体95.7%、小学校95.7%、中学校96.5%)。小学校よりも中学校において朝食欠食は多く、特に女子生徒では毎日食べる者が77.4%と依然少ない状況であった。また小学校においても第2回目の結果では、わずかに食べる頻度が少ない方へ分布が広がっていた。

一方、朝食の内容については定食型7.2%(1回目4.1%)、軽食型45.1%(1回目44%)、主食偏重34.2%(1回目44%)、おやつ型7.3%(1回目8%)となっており、やや改善の傾向が見られた。

給食の残食に対する意識は、第1回とほぼ同様の分布であった。給食での地場産物使用を知っている者は80.7%あり、特に小学校6年生は第1回の76.7%から85.2%へと大幅に向上した。

生活習慣については、就寝時間が11時をすぎる者が2割、運動や外遊びをあまりしない者が5割と1回目と同様の結果であった。

(2)保護者の実態

小中学生の保護者 1027 名を集計対象とした。

子どもの朝食摂食状況について、学校のある日のうちで「毎日食べる」と回答した割合は全体として 90.5%であった。保護者自身の平日の朝食摂食頻度、調理にかける時間、朝食への意識の状況は1回目と同様の分布であった。

給食について献立表、給食だよりを見ると答えたものの割合は1回目と同様の分布であった。また給食に地場産物が使われていることを知らない保護者は全体で5%（1回目 8.6%）であった。

(3)児童生徒の朝食摂取状況に及ぼす家庭の食事環境の影響

児童生徒が朝食を毎日食べることに及ぼす家庭での食事環境の影響を検討するため、2回目の調査において家庭ごとの調査に協力が得られた265家庭の児童生徒と保護者の対応データを用いて分析した。児童生徒の朝食状況は「毎日朝食を食べる」、「朝食を食べない日がある」に分類し、保護者の各項目の関連性を検討した。

「毎日朝食を食べる」児童生徒では、保護者の朝食頻度が高い家庭である傾向が認められた。また、児童生徒が「毎日朝食を食べる」家庭の保護者は、朝食を食べなくても他の食事で補えると「思う」と回答する割合や、朝食は子どもの健康にとって大切であると「思う」と回答する割合が高かった。

数字で変化のあった事項について

数値上、成果として見られたのは、例えば次の点であった。

- ・給食に笠岡市や岡山県の食材（地場産物）が使われていることを知っている者の割合（H23 6月 H23 11月）
小中学生全体（77.9% 80.7%）、小学生（76.3% 80.2%）、小4（75.9% 74.8%）、小6（76.7% 85.2%）、
中学生（81.0% 81.6%）
- ・学校給食における地場産物の使用割合
H22 44% H23 45.2%

例えば次のことについては、本事業を通じた数値の向上は見られなかった。

- ・給食の残食率
H20 17.6% H21 17.0% H22 15.6% H23 16.2%
- ・朝食を毎日食べる児童生徒の割合
H23 6月 83.7% H23 11月 83.1%

そうした中、実践中心校である神内小学校では、第1回目も第2回目も朝食を毎日食べる割合が100%であり、しかも第2回目は第1回目比べて「軽食型」の朝食を摂る児童の割合が高まっている結果が表れた。

今日の朝食は何を食べましたか？

		定食型	軽食型	主食偏重型	おやつ型	無効回答
神内小1回目	総数	44	13	18	11	0
	%	4.5	29.5	40.9	25.0	0.0
神内小2回目	総数	43	26	11	4	0
	%	4.7	60.5	25.6	9.3	0.0
全小学校1回目	総数	870	358	367	64	40
	%	4.7	41.1	42.2	7.4	4.6
全小学校2回目	総数	867	407	279	70	48
	%	7.3	46.9	32.2	8.1	5.5

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・給食に笠岡市や岡山県の食材（地場産物）が使われていることを知っている割合が高まったことは、「食育通信」「給食だより」等を通して、学校や家庭向けに地産地消の取組について繰り返し啓発した成果であると考えられる。
- ・神内小学校児童の朝食内容は第1回調査に比べて第2回が改善され、おやつ型、主食偏重型が少なくなり、軽食型が増えた。各教科・領域を通した様々な授業実践や、学校行事、家庭・地域との連携による取組が効果をもたらしているものと考えられる。保護者の意識や行動にも理組の効果は表れており、平日の朝食を毎日食べる割合が高くなり、「子どもは朝食を食べなくてはいけない」と答える割合も高くなった。児童を通して働きかけたことが保護者へ波及し、その結果、各家庭の朝食内容自体も良くなったものと考えられる。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

朝食摂取について、食べることは大切であるという意識は高めることができた。しかし毎日摂食することが実行できる児童生徒は約8割と、全国平均に比べて依然として低いことから、今後も継続的に家庭へ意識の変容が波及するような取組を実施することが必要であると考えられる。

児童生徒及び保護者いずれも、給食の地場産物利用認知の割合がやや高い分布となった。食に関する指導の効果が知識獲得の面で得られたものと考えられる。一方で「給食を残してはいけない、嫌いなものでも食べる」という態度には影響が表れていない。給食の良さを見直し、進んで食べることができる児童生徒を育成するよう、さらに方策を検討する必要があると考えられる。

朝食を食べることは大切であるという意識は、児童生徒及び保護者いずれも高い。ただ、望ましい朝食づくりを実行できる家庭は目に見えて増加していないことから、保護者の意識や行動にも配慮しつつ、今後も家庭および児童生徒へ朝食内容の改善を継続的に働きかける必要がある。この点において、神内小学校の様々な取組の成果には説得力があり、大いに参考にしたい。朝食摂食率が100%の学校は他に見られないし、朝食内容も短期間で大きく改善しているからである。